

高

校生のころからの夢がかなった。外交官試験、司法試験と並ぶ難関、公認会計士試験（2次）に合格したのだ。3年生のときに1度失敗して、2度目の挑戦、しかも現役合格である。

彼女が「公認会計士」のを知ったのは高校のとき。入学した商業高校の先生が、なんと中大の経理研の出身だったという。「ほんとたまたまなんですよ」と笑う。商業高校に入ったのも、先生に出会い、そして中大を紹介されたのも。

中大に入学して、経理研に入った。経理研は予備校のようなもので、毎日授業があった。厳しい授業にはじめは500人くらいいた人も、最後には50人くらいになっていた。「うーん、やめようとは思わなかったですね。高校のころからずっと目指してきて、いまさらもうやめられないっていう気持ちでした」。5月に短答試験、6月に発表、そして8月に論文、11月に2次合格発表。「ほんと長かった！」。特に8月に論文試験を受け

現役でみごと

公認会計士合格の縁

商学部 江口早紀さん

てから、11月の発表までの3カ月。「はじめは解放されて遊んでたんですけど、近づくにつれて不安で不安で」。発表は金融庁前の掲示を見に行った。落ちていても自分の目で見たい、という気持ちだった。

「自分の名前を発見したときは、思わず走り出しちゃいました。感動しちゃって。で、あったかどうか不安になってもう一回見に行ったり（笑）」

そして、新日本監査法人入りも決まった。サークルもバイトもせず、

会計士ひとすじの大学4年間。得られたものは？「やっぱり友だちですね。経理研の授業で毎日会話し、苦楽をともにした仲ですから、すごく仲良くなりました。広く浅くっていうのが大学なのかもしれないけど、私は狭いけど本当に深い友だちができた。今から、一緒に卒業旅行の打ち合わせなんですよ」

冬休み前、あかるい声が弾んだ。（八並）

サ

サークル統一会議議長、連盟会議議長、文化連盟委員長……すべての役職で女性初である。

「中学や高校で、生徒会長とか一度もしたことないんですよ。これらの役職に就いたのは、辞達学会の先輩が声をかけてくれたからで」。山崎さんは穏やかな表情で話す。でも、大変だったでしょう。「女性は私ひとりという意識もありましたね。でも、私はあまり意識しなかったですよ。行動で示せばいいと思っていました。それに、みなさんが温かい眼差しで見守ってくれたのは、嬉しかったですね」。慎重に言葉を選びながら語る。苦勞もあつたでしょうね？

「中大には、色々なサークルがありますからね。あるサークルを知るために、本を読んで研究したこともありましたよ（笑）」

山崎議長の前で実ったことは多い。サークル棟では、長年の懸案であった各部室へのエアコンの設置やインターネット回線の設置

「女性初のリーダー」

経験生かして

文学部 山崎友紀子さん

も着工にこぎつけた。「でも、それは多くの先輩方が築いてきた成果ですから」。あくまでも、謙虚な姿勢だ。価値観が多様化する時代。学生の興味も従来のサークルにおさまらず、サークル活動にかかわらない学生も増えていくと聞く。「多様な学生の意見を、どう集約して、どのように学生生活の改善に反映させていくのか。自治って本当に難しいですよ」。現状に留まらず、時代に合う

よりよい自治のかたちを探求するために、日本各地の大学へ足を伸ばし、

あるべき学生自治のかたちを探った。見聞した内容は、課題と共に後進に託したという。

就職先は、ある鉄道会社の生活サービス関連部門。最近はやりの「駅ナカ」といった業種である。

「社内ベンチャー制度などに取り組んでみたいですね。そして、よきリーダーになりたい。小さな意見だからと潰すことなく、組織に生かしていくことができるようなリーダーに」

（滝沢）



右腕が大きく水平にしまって打者を幻惑するサイドスロー。

3年次の秋季は、一足先に巨人に入団した亀井義行選手と投・打のコンビで中大硬式野球部「東都25年ぶり」の優勝を果たし、最優秀投手に選ばれた。そして亀井先輩を追うように巨人入りである。

昨年が続くことしも、わたし硬式野球部の寮に踏み入った。折しも、巨人との仮契約で背番号がきまった翌日――。

「63」という背番号は？

「すっげ〜うれしい！」

想定外の答えが返ってきた。というのも、63という数字のゴロ合わせを前夜、アレコレ考えたのだが、なかなか解けず、本人もそうなんだろうなと思いきんでいたからである。ムリヤリ考えたのが6×3＝18で、父・照夫さん（元ヤクルト投手）がプロ入り当初つけていた番号ということだった。

ケロリとして、本人のたまわく。「大好きなイチロー選手が51。俺のいまの背番号が12。足したら？」
 そうなのかあ。

野球は、「物心つく前から始めていて、自然と投げていた」そうだ。野球以外の習い事も。「小1から6



夫さんのこと、そして巨人軍のことを聞いてみる。「みんなに聞かれるんだけど、父には野球を教え

年間はピアノ。水泳もやっていたね。母が、何事も途中で辞めたら中途半端になってしまう、という教えだったの、それだけ守りました」

授業にも、きちんと出席する。野球部員はあまり授業には……と思っていた不明を恥じるばかりである。じつは、幼稚園から高校までずっと皆勤賞、だったという。「そう簡単に休ませてくれる母親じゃなかったからね（笑）」

母校・佐野日大高校は、足利女子高校出身のわたしにはとても身近な気分なのである。「高校3年の甲子園前の夏、昼休みに下投げをして遊んでいた、監督から、下からいけるんじゃないか？」と言われて投げ方を変えた。スピードよりコントロール重視。それが親子2代のプロ入りの道につながった。

昨年11・18ドラフト会議の日の記者会見。「自分が生まれたとき、もう父は引退していた。父の姿はビデオでしか見られなかったが、それが原点」と語る姿が印象的だった。照

巨人入り、背番号「63」

「父のビデオが原点」

文学部 会田有志さん

と、「あ〜〇〇の質問ね」と、先読みされてしまった。「視力いいですね！」

と耳がデカイのと、体が柔らかいと冗談まじりに。きさくな、いい人である。

ちなみにほかにもバック転、バツク宙も得意。この4年間、怪我はしたことがないのは、柔軟な体のためです。きつと。そう言うと、「ヨーグルトは毎日2個ずつ食べる。おいしくて健康にいい、これ以上のものはないです。あと、あんず（アプリコット）も好物」と食の話もひとしきり。

同期で気になる選手、目標の投手はいますか？

「いないです。プレーはみんな違うわけだし、他の人をみていても仕方がない」

プレッシャーなどないようだ。そういえば、記者会見でも落ち着いて見えた。1年前の亀井選手よりよほどリラックスして。イチロー選手への尊敬は別格のようだ。「イチロー選手は、自分の信念を持っていて、自分の世界があるから本当に尊敬しています」

1月中旬から巨人の合同自主トレ、2月には宮崎キャンプが始まった。昨年、悲惨な結果に泣いた巨人。そして今年、新・原ジャイアンツのもと、巨人愛の再結成をはかる。「原監督……選手と触れあっているイメージで、清水（達也・中大硬式野球部）監督みたい」（記者会見）

「有志、すごい名前ですね」と言う、「3番目だから、グレなようにつけたらしい」と笑った。その意を、「人は人、自分は自分、信念を守り貫く志」と読んでみたい。〈志〉のピッチャーは、「まずは開幕一軍」と力強く言った。

（白田）

水

泳でオリンピックに行く「水泳でオリンピックに行きたい」。そんな夢を持って、中央大学にスポーツ推薦で入学。名門・中大水泳部で、ただひたすらに泳ぎ続けてきた。

あの北島康介もいる百・平泳ぎ種目で、インカレの1、4年次に優勝、2、3年次には2位、日本選手権では1年次4位、2、3年次には2位、4年次には3位。また、4年次にはユニバーシアードで3位の結果を残している。常にトップ

プレベルの選手との争いである。

挫折もあった。

3年次だ。オリ

ピック選考会となった日本選手権で、10分の2秒及ばず日本代表にもれた。悔しさのあまり泳ぐ気がしなくなり、インカレを目指すチームと一緒に、「身の入らない練習」が続いたそうだ。とはいえ、1度の練習は5000m、それを週10回。いつもと変わらない、大変な練習量なのである。

そんなココロのスランプから脱したのは、「椎間板ヘルニアになり、2週間泳げない状態になってしまっ

てからだ」と話す。練習を観望席から眺めながら、「インカレでオリンピックの決勝のタイムを超えてやる」。新しく立てた目標が、それからの泳ぎにあらわれた。結果は2位だったものの、その目標を突破した。

「達成した時の喜びが大きいから、失敗した時の悔しさがあから願張れる」。成功することも失敗することもムダではない。泳ぎ続けること、山下さんは次へ続く糧をつかみ

とったようだ。

——今の目標

は？

「オリンピック

ク選考会で日本

代表入りすることです」。選考会はこの4月である。冬から春にかけて部の合宿やインターナショナル強化合宿など、選考会に向けてトレーニングを重ねている。「卒業式は出られないかも」と言った。

入学次の「青雲の志」をわがものに——08年北京へ向けて、

寒い寒い多摩キャンパスで、あつく燃える闘志をみた。

(池内)

中

学のと、品川区から現在の川崎市に引っ越した。あまりなじめなかった、という。ちょうどメディアでは「キレる15歳」の報道が盛んだった。

「キレる15歳の特徴は、ふだんは、おとなしい・成績は優秀・友達が少ない。自分の特徴と一致しているなあ、って」

そっくり当てはまっている、でも自分はキレない。かすかな違和感。図式的に、イメージで語るのとはよくないと思つたそうだ。

「テレビ

がイメージで語っているのとは対照的に、

新聞は冷静に判断していた。自分で文章を読んで、自分で理性的に判断できる。活字・新聞を信頼するようになったきっかけですね」

新聞記者への憧れは将来の目標に変わった。そして4月から、念願の新聞記者である。難関を突破して、毎日新聞社入社が決まった。

「就職試験も新聞の記者職しか受けなかった」と一筋。

大学では何を？ と聞いたら、ケレン味なく「勉強」という答えが返ってきた。「サークルも1年

の5月に辞めたし、勉強が好きだから」。頭が下がるわけである。

FLPのジャーナリズムプログラムにも参加した。

「1期生だったから、大学も、自分たちも手探りだった。でも不安は1回も感じたことがなかったですね。刺激満載で非常におもしろかった」

理論と実践、両方を学んだという。「取材の実践も行ったことで、自分が将来新聞記者として働いている具体的イメージを持つことができた。

念願の毎日新聞記者

思いの原点

竹地広憲さん

文学部

なりたいですか？

「若者に生きる力を養ってほしい。だから、教育に関連した記事を書きたい。あとは地域。自分は、地元

魅力ある地域を伝えたいですね」

毎日新聞はほとんどの記事が署名記事だ。まずは地方支局勤務をへて、

【竹地広憲】のクレジットが本版(全国版)紙面を飾るのはいつだろう。

「新聞記者になったら、体力勝負だから頑張らなきゃ！」

第一線に立つ、腕まくりの心意気である。

(岩倉)



05 年11・27——全日本視覚障害者柔道選手権90kg以下級で、本命と目された相手を、小内刈からの「朽木倒し」で一本勝ち、日本の頂点に立った。

「緑内障」……眼圧が高くなることで視神経が障害され、視野異常や視力低下をもたらす病気だ。外見では分からないほどだが、そんな病を抱えた柔道チャンピオンである。

「ずんぐりむつくり。いかにも柔道向きの体型。強そうで、すこし強そうな。そんな感じもしたのだけれど、語り出すと、表情が丸みをおびて、口調も優しくかった。」

「19歳のときでした」と語る。

「右目が見えなくなりました。そして3浪して中大に入学。2年の後期試験中ですね、両目ともダメになったのは」

04年2月、入院。手術はぶじ終わった、と信じていた。数日を置いて、包帯がとれたとき、四囲が映らなかつた。光の世界が消えていた。

「入院中は押さえを当てられていて、自分の目が見えなくなっていることには気付かずにいたんです。でも押さえを取った後も、見えなくて……。信じがたい現実だった」

「視覚障害者1級——そう判断された。」

「進路はどうなるんだ?」。彼は

司法試験を目指していたのだ。が、六法全書をもう読めない。あきらめざるを得なかつた。挫折と焦り、あるいは不条理への怒り。だが、どん底の葛藤のなかにも、強い意志があり、友がいた。

初瀬さんの横にいるのは、池山晋也さん(法5)。この日も、一緒にやってきた。

「彼は本当にスゴイんだ」と、初瀬さんは誇らしげに話した。「毎日一緒にいてくれる。僕の授業が終わるのを待っていてくれるし、どこへ行くにも隣にいてくれるんです」

同じ長崎出身。予備校仲間だそうである。初瀬さんの最初の失意もつぶさに知っている。

「ある意味、家族より大切だよ」と初瀬さんが言った。「なんか照れるなあ」。池山さんが笑う。強そうな男ふたりが照れ、笑い合う。優しい空気が流れている。過剰に干渉せず、いつも側にいるという関係性。友情といつてはどちらも、かえって照れるだろう。むしろ無二の「絆」のように思えてくる。

池山さんの「支え」に、彼女(小



川絢子さん(法5)の「励まし」が加わった。中学、高校と柔道をしてきた初瀬さんに、彼女が言った

「柔道をしているところが見たい。頑張っている姿が見たいのよ」

不意打ちのように、その一言で初瀬さんの何かが動いた。去年9月のことである。大会まで2カ月、彼は連盟へ問い合わせ、柔道の帯を再び締めた。目の見えない自分にもできること、体が

それを覚えていた。そして、つかんだ「日本」である。

優勝した実感。「こんなものか、つてあつさりしましたね。けど大会には皇太子殿下がいらっ

しゃっていて、すごかったです。ね、次の大会も頑張ってくださいね」と声をかけていただいたのです。そこで改めて優勝を実感しました。彼は、「パラリンピックを目指します」とお答えした。

ことはフランスで世界大会が開かれる。北京パラリンピックは2年後。世界の舞台を語る表情が弾んでいった。池山さんも、隣でうれしそうに相槌を打つ。

「ここまでこられたのは本当に池山と、彼女のおかげ。病気になるまで、生きるか死ぬかまで考えたんだ。目が見えるようになる夢を何度も見ました。そして、落ち込んだ」

「今は夢の中でも、見えない自分です」

現実を受けとめる。そして、進む。卒業後は、東京に残って将来を考えた、という。「今、視覚障害者に与えられている職つてすごく少ないんです。僕は盲人の人たちでできる職を増やしたい。彼らに雇用機会を与えたり、できる仕事を探したり。そんな会社を興せないかなあ

と考えているんですが。すべてはこれからだが、「法・法」の頭脳と体力でこの人なら新しいことを、と思わせるものがある。3浪の25歳。

池山さんは、1浪1留・24歳。公務員試験に向けて勉強中である。ふたりの会話。

初瀬「でも彼には、試験に落ちて協力してもらわないとなあ。トコトン勉強の邪魔をしますよ」

池山「できるだけ落ちるように頑張りますよ」

うれしい電話の報告が入ったのは、1月の終わりだった。「フランスの世界大会出場、確定しました!」決戦は6月である。(山崎)

全国視覚障害者柔道「日本」!!

彼と彼女と自分——の凱歌

法学部

初瀬勇輔さん

「私、中国が大好きなんです」
“知的なお姉さん”と

いった印象を受ける安藤さん。中国の話になると、少女のように無邪気な笑顔になった。

3年の秋から約1年間、中国の清華大学に留学。憧れの中国での生活に、「リアルな中国が見たい」と期待に胸を膨らませていた。

「でも、留学初日でホームシックになっちゃったんです。だまされたり、お金を盗まれたりもしましたし……。中国なんてキラ

イ！って思ったこともありません」

しかし、中国での貴重な経験は、そんな一時期の思いを吹き飛ばすほどのものだった。

「農村の貧しい人々を支援するボランティアに参加したんです。世界では中国の経済発展が目まぐるしいけど、視点を変えれば、経済格差などの問題もあります。でも、貧しい暮らしの中でも、農村の子供たちはいつも笑顔でした。きっと日本の子供より笑ってる時間が長いんだろうな。そんな子どもらしい子どもに出会えて、なんだかうれしかったですね」

文化の違いにも触れた。中国人の

友だちと遊びに行ったりしたこと。

「みんなで食事をしたんですけど、向こうにはワリカンの制度がなくてびっくりしました。順番で1人が全員分の分を払うんです。私は『払います』ってタイミングよく言い出せず、結局一度も払えませんでした。それが今でも申し訳なかつたなあと思つてます」

日本に帰ってから物価の違いに戸惑った。

「買い物中に商品を見ても、中国なら10分の1くらいの値段だなんて思うと、しばらくは何も買えませんでした」と、苦笑い。

中大の中国言語文化専攻からは初めての卒業生だそうですね。「そうらしいですね(笑)。授業は、お話し“って感じでしたよ。先生も生徒も手探り状態です」

卒業後は食品メーカーに勤める予定。

「中国に工場がある会社なんです。将来は中国に派遣されることを目指して頑張ります」

今度はキリッとした人の笑顔になった。

(中田)

「人より多く動かないとチャン

スがつかめない。一本取るのも大変!」。小柄な体型からは想像がつかないが、全日本大学対抗フェンシング選手権大会(インカレ)で3連覇した覇者である。

選手だった父親の影響で、フェンシングを始めたのは小学1年の頃からだという。フェンシングはフルーレ、エペ、サーブルの3種目に分かれており、巻下さんは胴と背が有効となるフルーレの選手だ。フェンシングの魅力とは?

「魅力……: 駆け引きですね」

奥が深そう。

2年次には勢いに乗って、そして3年次は先輩の意地で勝ち取ったインカレでの優勝。2年次は素直に喜べたという優勝も、3連覇を飾った4年次には「ホッとした」そうである。

フェンシング人口は日本全国でも10万人と少ない。中大のフェンシング部も男子は16人いたが、女子は彼女を含め2人だけだった。練習は週4―5日、1日3時間は練習時間が長いわけではないようだが、どうやって力をつけていったのだ

ろう。

「人数が少ないから男子と一緒に練習をしなきゃいけないので、それが逆によかったんだと思います」

本来の種目でないサーブルの試合中に鞆帯部分が断裂し、1カ月練習ができないこともあったそう。

身長156cm。国内試合はともかく国際試合となると、大きな選手が多いんでしょう? 「そうなんです。それがイヤ、みたいな表情になって「やはり体が大きいほうが有利といえれば有利ですからね」。それをカバーする、敏捷な動き、突きの鋭さとしなやかさ。

当然、北京

フェンシング3連覇の

女王は156センチ

巻下陽子さん

当然、北京

五輪を視野に入れて、と聞いたなら、「オリンピックのことは言わないことにしている。目標が高いとダメなんで……」と首をすくめて笑った。

春からは秋田クラブに所属し、秋田国体に向けての2年間トレーニングを続ける。そして今年10月には世界選手権も控えている。国外での試合に出場するためにはナショナルチームの8人にランクインしなくてはいけない。

しなやかに、高い壁を突け!

(大池)



研

研究室のドアを開けると、部屋半分がサッカーコート仕立てである。『ピッチ』に立ちながら、

「大会前なんか、『きょうは終日やるぞー!』と言って夜通し作業したこともありました。午後9時にはクーラーが切れるから、もう汗だくで。」

大型ロボット「AIBO」の研究に励む、精密機械工学科の加瀬翔太さんだ。

中大と東大の共同研究チーム「AIBO」に所属し、4年生の夏大阪で開かれた「RoboCup」大会に出場。この大会ではタテ4mヨコ6mのサッカーコートで、1チーム4体のAIBOが前後半各15分のサッカー試合をする。世界規模で、24チームが参加した。

「残りあと10秒、というところでチリに負けてしまいました。あと1点で、5年ぶりの決勝進出だったのになあ」

全身に、悔しさにじむところである。加瀬さんは、大学院生も含む10人のチームの最年少メンバーとして参加した。「脳」にもあたる重要なパーツのプログラミング。要の役

回りだ。

「『目による認識』を担当しました。ラインとライン沿いに立つ4本の

ランドマークを基準にAIBOたちは自分の位置を把握するんです。このメモリースティックが脳の役割をしています」

4年間の集大成である卒業論文も、この大会での経験を生かして「RoboCup四足ロボットリーグにおける白線情報による自己位置同定」をテーマに選んだ。

研究室内のサッカーコート

の中で実物を見ながらの丁寧な解説に加え、「せっかくだから」とAIBOの試合の再現も。気配りも満点の加瀬さんを、チームの先輩である奥隅隆さん(修士)は、こう語る。

「長い時間熱心に取り組んでいるという印象があります。その証拠に、彼はちゃんと結果を残してくれま



るし」

加瀬さんは「生意気ってよく言われます」と自嘲するのだが、奥隅さん

によれば、「試合中は上下関係などなく、どんな意見を出し合える雰囲気なもの『ARAIIBO』なのだ」そうだ。失点にはならない。

4月からは大学院に進学し、引き続き「目の認識」研究を行う。現在、ランドマークがなくても白線だけで

友よ、「ARAIIBO」よ
大学院でロボカップ制覇の夢
理工学部 加瀬翔太さん

自己位置が分かるのが最先端技術。「あと2年で」その世界水準まで到達すること

が目標だと、語った。

2050年には、「ロボットは人に勝つ」と言われている。

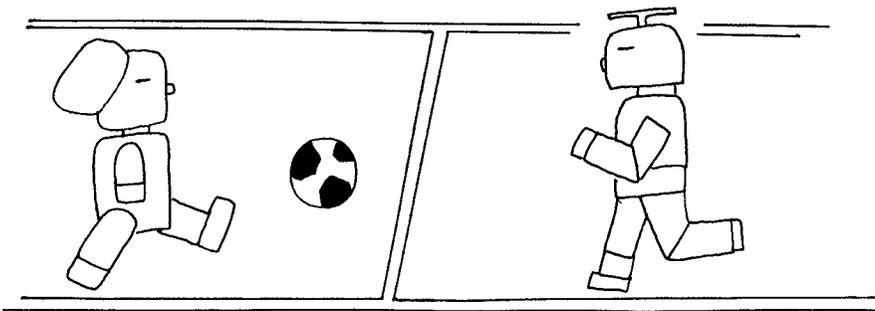
「これからロボットは、より人間的になっていきます。人間とロボットが、お互いを思いやって共存できる世界作りに貢献したいです」

今年のRoboCup世界大会は、ドイツで行われる。

2つの「サッカー」ワールドカップ大会——ヒトもロボットも、ひと

きわ暑い夏になる。

(津江)



スーツ姿もすっかりなじんで、4月から三井物産のフレックシユマン。人あたりのよさは、塾講師経験にもよるだろうか。1年から4年間続けた。昨年末には、京都宇治市で塾講師（同志社大生）が小6女児を殺害した事件——。「ひとごとではありませぬ」と言ったら、「そうですね。ウチでも事件当日に本校会議が開かれ今後の対応におわれましたから」と打ち明け話。塾の名前を聞いたら、ナーンダ横浜の私

も通った塾、という身近さだった。活動的で、ユニークな人である。「何かを企画するのが好き」。1年の後期から「ブラウンバックランチ」の企画を始めた。留学・インターンシップなどをした学生たちで互いの経験をシェアし合い、発表する。友人に声をかけて輪を広げていった。総政棟の4Fでの学生ディスカッションには、10人もの先生が顔を見せる盛況だったという。佐藤さんがシェアしたのは、医療ミスで亡くした実祖父の裁判の経験。医療ミスについて、病院の対応は日本と外国の場合でどう違うかをシミュレーションするな

どして白熱した。

3年次、「中大をやめようか、と思ったことも」。エッ? と驚く場面だが、中大をやめて、経営工学をアメリカの大学で勉強しなかったのだそう。諸事情で成りなかったが、英語を勉強した成果は、TOEFL 300点満点中260点。TOEICで言えば、900点(990点満点)くらいだというからうらやましい。インスパイアというソフト会社でインターンシップ体験。就職活動で

**塾講師、学部イベントも
アフティブに商社マンの道**

総合政策学部
佐藤孝徳さん

は、いくつか決まったが、一番早く決まった三井物産への就職を決めた。これからど

んなことをしていきたいですか、と聞くと、「横浜で何かしたい。自分の町に何か恩返しをしたい」と目標は明確である。

「就職活動の極意も聞いておこう。」「キャリアクターと話し方が一致するように話すといいと思いますよ」と佐藤さん。塾講師として親と面接する機会を重ねるうちに学んだのだろうか。

「自分の見せ方」——
勉強しなきゃ。

(池内)

「**这**」是我正在读书的中央大学（これが、私の通う中央大学です）

中大には年間ざっと1万人の見学者が訪れる。受験生やその保護者はもちろん、遠く外国から視察団が来ることも。彼らを案内するのが、学生ツアーコンダクター（略称ツアーコン）。なかに、日本語・英語・中国語を巧みに操る女性もいた——中国・北京出身のダイ・ソエンさんだ。

経験と自信

経済学部
ダイ・ソエンさん

生活費を自分で稼がなくてはならず、色々なアルバイトをした。家電量販店でプリンターの販売幹旋が

印象に残っているという。「熱心にトークを展開しても、お客さんに身をひかれてしまう。商品を欲しそうに眺めているお客さんに対して、決断を促すように声をかけるのがコツです」。年末商戦で、年賀状プリンターの類を1日で最高45台販売した記録の持ち主。なによりも、日本人の消費心理を把握しているから驚きである。

学ぶ意欲も貪欲だ。1年次に出場した学内英語

スピーチコンテストでは、夏休みにアルバイトをしたWWF（世界自然保護基金）での経験から、ウミガメの保護をテーマにスピーチし学長賞を受賞。2年次には国外留学を目標にしてコンピューター版TOEFLで250点をマークした……。

卒業後は、都市銀行の法人部門に進む。「経済学会のOB・OGの話聞いて、金融や銀行業に興味を持ったんです。仕事を通じて、多くの会社経営を垣間見られま

——バイトも勉学も

すから」。将来の夢は自分の会社を持つこと

とキャリアプランも明確だ。目下、政治経熱の日中関係。小泉首相の靖国参拜問題について水を向くと、「私はトラブルになるようなことを、自分から話したくないです」と控え目に話した。「国という枠組みよりも、グローバルな視点が必要だと思います。自国の文化を誇りに思うのは良いですが、それが過度なナショナリズムにつながるのはどうか……お互いをひとりの人間として認め合うことが大切ですよね」

(滝沢)



3年の夏に、同じ総合政策学部

の友だちとふたりで、神奈川県から名古屋まで旅行した。徒歩で、理由は「金がなかったから」。「電車とかを使うよりも安くいけると思ってたんですよ」。ナルホドネ、と思いはするが、なかなかできませんよ、こんなトホーもない旅は。

季節は夏。暑くてすぐにノドが乾く。飲み物代で約3万円ナリが飛んでいった。9日後に目的地の名古屋に到着だったそうだ。9日間の道中、ホテルに泊

まったのは2回だけ。あとはほとんど野宿――。

合計が、4万5000円。「ふつうに電車使ったら豪遊できたんじゃないかな」と苦笑い、また高笑い。帰りは深夜バスを使った。5000円だったそう。4万5000円あれば、4往復半である。徒歩の旅の良さはありましたか？

「途中で、僕たちみたいに、交通機関を使わずに旅をしている人たちに会いましたよ。まあ、自転車を使っている人が多かったんですけど」。6日目は風邪を引いたのだが、それ

でもそのまま歩き続けた。夜は掛川の橋の下で休んだ。一番楽しかったことは？ 「各地の名産を食べべられたことですかねえ」。ふっと顔がゆるんだ。

この春から駒澤大学法科大学院に進学する。高校生のとき、寮のフロア長など自治組織に関わったときから、ルールに対して考えることが多かった。「ルールは、一人だけに良いものではダメなんです。より多くの人が納得するものでないと」

名古屋まで歩き旅
弁護士の道めざす

総合政策学部 西山直仁さん

寮には中学生から高校生までがいた。那須高原海城中・高である。年のちがう人たちをどうまとめるかということも考えることも面白かった。

「価値観が違う人との間で問題を起きる。大事なのは、その人のことを理解すること」「基本に忠実になりすぎて、相談者のために動ける人が少ない。相談者に対して思いやりの心をもてる人になりたい」

遠くをめざす健脚、旅も弁護士も同じである。

(猪瀬)



射撃の学生チャンピオン

はるか遠くの的に狙いを定め、引き金を引く。そのギリギリの緊張感が「たまらないんです」と加藤さんは笑う。「射撃はまさに、自分との戦い。メンタルな部分が大きいので、妥協や不安はすぐに結果に現れてしまうんです」

射撃との出会いは、高校時代。弓道部に入りたかったそうだが、進学した高校にはなく、かわりに入部したのが当時はまだ愛好会だった射撃部だったという。

進学した中

「飛び鳥落とす」

文学部 射撃チャンピオン
加藤由紀子さん

大で射撃部に所属し、大学1年のときから、順調に成績を残してきた。1、2年のときに欧州でのWカップで優勝。3年のときは全日本選手権2位。現在は全日本学生選手権(インカレ)の10mの部門でのタイトルと、国体の50mの部門でのタイトルを所持している。これぞまさしく「飛び鳥を落とす」ウデと勢い、というべきだが、「3年のときは、思うような成績が出せず、苦労しました。1、2年のときにある程度記録を出していたので、それがプレッシャーになって

いたんだと思います。4年生になってからは、大学最後の1年なのだから思いっきりやろうと決めました。そうしたら、自然とモチベーションもあがって成績につながりました」

1歩進んで2歩下がり、3歩目で大きく飛躍、の精神。日曜や授業の合間を利用しての練習と、学校生活との両立。さらに加藤さんは、教師を目指して教職課程をとっていたのだからその大変さはひとしおだ。

「両立は大変でしたが、とても充実していました。将来は教師として、射撃部を指導できたら、と思います。射撃部があったら……の話ですけどね」

ところで、射撃の世界においては10mの部では鉛を使うが、50mの部門では実弾を使うそうである。加藤さんは現在ひとり暮らし。全然コワくないでしょう、イザとなったら……なんて冗談を言ったら、「いえいえ、そんなあ」としとやかに笑う射撃の名手である。

(植松)

全

国の大学の政策・情報系の学部生が集まって年に2度行われる「政策・情報学生交流会」に参加。また1年の後期にはSA (Student Adviser) と呼ばれる学部の新入生受け入れスタッフを務めた。総政学部では、ちよつとした有名人である。

「入学当初はそんなに目立っていた訳じゃなかった」と彼女は振り返る。

交流会ではいくつかの分科会に分かれ話し合いを重ね、時にはフィールドワークをし、最後は全体に向けてプレゼンテーションを行う。石井さんが参加した分科会はコミュニケーション、政策学、教育と多様にわたるが、最も興味深かったのはギャンブルの分科会。パチンコがなぜ合法なのか、という話から始まり、「東京にカジノを」という説得力のあるプレゼンテーションを作成した。

「東京にカジノを」… 交流会プレゼンで磨いた自信

総合政策学部

石井愛子さん

「振り返ると辛いこともあったけど、良い出会いがあった。大学生活がめちゃくちゃ楽しかったのは、50%が自分で、残りは友達のおかげですね」
おだやかな口調、笑顔の総括である。

交流会をきっかけに「総政にも面

白い人がたくさんいる」と気づき、多くの学部生が参加するSAに。1年の春休みは毎日、学校へ出向き企画を練り上げていった。それが「プレイクスルー」につながった、という。04年には学部でのイベントの企画運営も行った。「人にいい影響を与えることはうれしい」と語る。人の意見をごく自然に受け入れるという技術も身につけ、充実感を味わった。

人とかかわることの楽しさと魅力。今春、総合人材ビジネスを手掛ける会社に就職する。人と企業のマッチングを行うコーディネーター。フリーターやニートの数が増加するなかで、これから社会的な意味合いも増していくにちがいない。

「振返ると辛いこともあったけど、良い出会いがあった。大学生活がめちゃくちゃ楽しかったのは、50%が自分で、残りは友達のおかげですね」
おだやかな口調、笑顔の総括である。

(大池)

彼

女の卒論テーマは「オーダーメイド医療のプログラミング化」。一人ひとりに合った薬を作るオーダーメイド医療という研究が、いま盛んに行われている。彼女はそれを暗号化し、より簡単にその人に合う薬を選ぼうというプログラミングを作ろうとしている。最先端の分野である。

「昨年、親が退職を前にがんを患ったんですね。それで、自分で合う薬を見つけられないか、と思ったのがきっかけです」

最先端・暗号分野研究と「波乱万丈」

理工学部

野呂明代さん

「職業的にいうとSEかなあ、という感じですが。でも、なにかこだわりがあるというよりは、自立して生活できるようにになりたい、というのがまずありますね」。

こんなにすっかりした彼女だが、この学科(電気電子情報通信工学科)にたどり着くまでは、い

ささか「波乱万丈」。

「高校ではもともと理系に進んでたんですけど、受験のときに文転したんですよ。で、別の大学の経営学部に入学したんですよ。でも、何か違うと思った。その大学は1年で辞めて、次の年、この理工に入学したんです。仮面浪人? いや、そんなんじゃないで、完全に経営学部のほうは辞めていました。手続きを

していなかっただけで」

卒業後、大学院へ進学する。

「将来につ

いて、悩むことは多々あります。このままこの道に進んでいいのだろうかなどと悩むのはしょっちゅうです」

野呂さんだつてそうなんだ、と妙に共感を覚えたりする。誰もが一度は経験する、自分は何がしたいのかと考える壁。それを正面から受け止め、道を拓いていく意思もまた、しっかりこちらに伝わってきた。

(橋本)



「いつの間にか吹奏楽部潰れ落ち着いた話ぶり。それも経験のたまものだろう。大学2年次、自身はコンクール初出場で全国大会金賞を経験した。」

吹奏楽部長をつとめた矢作さんは、「ユーホニアム」を弾き始めて10年のベテランである。中学生からはじめた吹奏楽、その時からユーホニアムと一緒だ。

「ユーホニアムは金管楽器の一部で、心地よいという意味があるんです。」

そう語る矢作さんの表情も心地よい。

もつとも「昔から人と同じというの好きじゃない」タチで、だから「楽器の選択も」となったようだ。

中大吹奏楽部は名門である。週に5日の練習、体育会系並みの厳しさだった。

「時間的拘束が長く大変だったけど、好きだったから苦じゃなかったですなえ」

みんなの推薦で部長に。吹奏楽部の顔として、大人に対する対応など苦労したという。

「キューバ関係の演奏会の依頼があったて、キューバ大使とお会いしたときは緊張しました。ゆっくりと

落ち着いた話ぶり。それも経験のたまものだろう。大学2年次、自身はコンクール初出場で全国大会金賞を経験した。

「初めてのコンクールで金賞なんてずるい！」と部員に羨ましがられたらしい。昨年は都大会で金賞。「都大会止まり」に悔しさがにじむところが名門サークルのゆえンである。

一面、「コンクールは、定期演奏や出張演奏の延長線で、別にコンクルールのため」という気持ちで練習はしていませんよ」とも

名門・吹奏楽部の4年

感動の調べ

法学部 矢作匡孝さん

いろいろな思い出がある。長野県の市民ホールでの演奏会。決して大きいとはいえないホールだったが、最前列に座った地元のおばあちゃん

は聞きながら涙していた。「自分たちの演奏で涙を流してくれる人がいると思ったら、感動しました。やってよかったと思えました。忘れがたいですよ」

話しながら、目が潤んだ。春からは銀行員に。「就職しても、吹奏楽は続けていきたいですね。ずっと」

(中島)



明るく、力強く、「大学生生活は毎日志を掲げてきたので、全く悔いはありませんね」という言葉が返ってくる。

学生中心のNGOに加わり、小学生に国際関係についての話をしたり、長期休暇を利用し海外ボランティアとして国際会議に参加したりと、積極的に活動を進めてきた。国際派。国境を越えて世界へ、という思いは早くからあったらしい。

国際派、

英国留学ハネに大学院へ

経済学部

岸智則さん

4年次に は、イギリスは ウェールズにある カーディフ大学に留学した。

言葉の問題は? 「初めのうちは苦勞の連続ですよ。マイノリティーであるという孤立感や不安感も味わいました。後半からは、授業内容が理解できるようになりましたけど」

授業だけでなく、レポートもテストも英語漬け。予習をしなければ、専門用語の飛び交う授業は全く分からなくなる。とりわけ「ゼミ形式の授業で議論を聞かせるのが大変だった」そうだ。

そんな日々の心の友は、インターネットだったらしい。「日本のニュースなんかもリアルタイムで見ましたよ」。夏目漱石はロンドン留学で日本的知識人の蹉跌に身悶えして発狂寸前になったけれど、インターネットの世はこんな効用もあるわけである。

「たくさんの国々から留学生が集まってくる。そんな意欲ある学生たちの中にいると、イギリスというだけなく、世界に留学した感覚がありました」

苦勞あればこそ、大いなる留学体験となったようだ。

4月から、一橋大学大学院に進む。テーマは東アジアにおける地域協力。すでに日・中の綱引きが始まった「東アジア共同体」構想の研究だ。まずはEUの統合プロセスなどの分析研究からとなりますが

モットーは何ですか? 「学びと行動をリンクさせること」経験から得た信念、と聞かえた。

(竹下)

照英、を思わせる容姿。身長190cm。中大陸上部やり投げの選手だ。1年次に次いで、3、4年次インカレ2連覇を果たした。

山本さんがやり投げと出合ったのは7年前。野球部に所属していた。「その肩で陸上をやってみないか？」と高校の陸上部の先生に誘われたのがきっかけだという。

「インカレの2、3カ月前になると授業中も落ち着かなくなる。机に座っていても、

僕ひとりだけベンを持つ手が硬直してしまっているんですね」。

しかし、当日、やり投げのピットに立つと、緊張がウソのように消え、集中できた。インカレ制覇はその結果である。「すごいですね」と言ったら、「いや、まだまだ。昨年の自己ベストは77mもつとイケルはずだった。80mは超えたい」と。克己の人である。

海外遠征も10回を超える。アジア選手権ではあの美女軍団を間近で見た、そうだ。

競技用のやりは、2・60m、800g。クロスステップという独特の走りをして投げる。走・飛・投・技・パワーのすべてをバランスよく鍛える

ことが大切なのである。だからこそケガも多い。山本さんは、今年、助走を無理やり止めようとして腰を痛めた。「そのせいで、今年はいい結果がだせなかった。去年あんなに練習してきたのに。いや〜でもホント今年は悔しかったです」と顔を覆った。

やり投げを続ける理由は何なのか。聞いてみた。すると彼は微笑みながら言った。

**記録更新のドキドキ感
やり投げ2連覇、大学院へ**

法学部 山本一喜さん

「自己ベストを更新したときの、あのワクワク感は何ものにも代えられない」

大会に行くことよりも、むしろ自己ベスト更新のための毎日毎日が、ワクワクなのかもしれない、そんな気がした。

卒業後は、地元、広島大学大学院の教育学部に進学し、健康スポーツを専攻する。「7年間やりを投げていて、まだわからないスポーツなんです。だからもっと学びたい。研究をしながら投げ続けたい」。もっと遠くへ、文武両道のやりの先に見据えるのは、北京。

(白田)

きりつとスーツ姿。内定先からの帰りだ。内定先はブライダル関連業界。

「結婚という大きなものを作り上げたい。何もないところから作ることをしたいんです」

柴田さんは在学中も学生団体を作り上げた。ウガンダ、フィリピン：野球を通じて海外へと飛んだ。もともと軟式野球部に所属していた。しかし大学2年次、野球を通して何かできることはないか」という考えが浮かんだ。「ちょうどその頃です」。友だちから、

結婚と「三角ベース」をプロデュース

法学部 柴田浩平さん

「はしゃぐ彼らを見て、楽しめる」。現地の子どもたちは大喜びだったという。

「友だちから、野球が普及していない国に野球を伝え、共に楽しみたい、そんな計画を持ちかけられた。同意しないわけがない。「そうして僕たちは学生団体へフィールド・オブ・ドリームズ」を作り上げました」

一去年はインドネシアなどで活動し、フィリピンでもイベントを行った。それから、と続く。

「NPO法人「アップリカ野球友の会」に所属しています」

野球を通じて、発展途

上国と日本の親善交流だ。誇らしげに「あと……」とまだ続く。4年次の9月、「JICAの枠組みの中の青年海外協力隊として、発展途上国のウガンダへも行きまして」

ウガンダでは、「三角ベース」の野球を教えた。戦後日本の野っ原ではやったのもこれだった。ベースは3つ、バットもグローブもいらぬ。「手で打つので、ゴムボールであればいいですよ。どこでも楽しめる」。現地の子どもたちは大喜びだったという。

も同じつてことを再確認できた。アフリカって遠い・怖いって思われがちじゃないですか。けど基本は何も変わらない」

「これからも野球を広めたい」と笑顔で話した。

(山崎)



往

路3位、総合8位に終わった箱根駅伝。1月3日、レース

終了後の陸上部OBらの声はききびしかった。「亜細亜（優勝）に負けるとは」。これもあろうに、というニュアンスが言葉のはしほしに強くにじむようだった。「伝統と名門」の期待ゆえである。

主将・池永は、こう振り返った。

「それなりに一生懸命に走って、練習を重ねてきた。昨日と今日、自分の走りができた選手、できなかった選手がいるけれども、結果として自分のどこか足りない部分があったと思う。優勝できなかったことが非常に残念に感じる」

前年の家高晋吾から、中大駅伝チームの主将を引き継いだ。前年は「ドラマチックな4位」、新チームはその上をめざして。じじつ往路4区で1位に踊り出、復路7区で再びトップに。「もしや悲願の優勝?」と思わせる途中展開だった。

池永は「花の2区」を走った。1

年から3年間「4区」を走り続けたランナーにとつて、最初で最後の舞台である。サイモン（日大）がいる、モグス（山梨学大）もいる。各校エース同士の激戦区間。途中、2人に抜かれたがあわてない。絶対に崩れない、安定した走りが池永の身上である。チームの絶大な信頼感もそこにあった。1区・奥田実からもらった

3位のタスキをキープして、3区・上野裕一郎にリレーした。

「前を追っていかなければいけなかった。トップでタスキを渡したかったのだが……」と、自分の走りについてはわずかに語るだけで、やはりチームのこと、主将としての言葉になる。

「年々、走ってきて、力がついて伸びてきたけど、優勝できなかったのが残念。最後の学年で『優勝』をめざして取り組んできたが、8位と



いう結果に終わったことに悔いが残る」

それ以上の悔しきは、

同じ4年の10区・加藤直人（法学部）だっただろう。8区で1位から5位、9区で7位に後退。昨年、全日本駅伝の快走をバネに、加藤にとつては初めてのハコネだった。アンカーは、ゴールに倒れこんだ。1つ順位を下げて、「悪夢の8位」。顔が涙でくしゃ

中大駅伝主将のハコネ

「8位」の悔しさを超えて

理工学部 池永和樹さん

くしゃだった。池永が近寄る。抱き上げ、同僚とその両肩

を支えた。

「箱根で」優勝するためにやってきたのに、優勝できず、残念」と加藤は言った。「自分が決めなきやいけなかったのに、決められなかった。大学生活の中で一番悔しい」

もう1人の4年生、5区・坂のぼりのエース、中村和哉（法学部）も「迷惑をかけて申し訳ない」と肩を落とした。1位から一時4位に転落

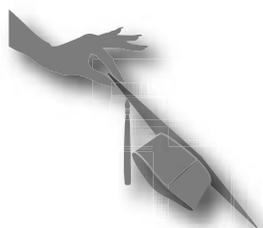
のあと3位で往路ゴールは、悔いが残った。

4年最後のハコネ。懸命に走って、なし得なかった自分を責める涙がある。遠く目標に届かなかった屈辱もある。同時に、出場できるのは、わずか10人の選手たちだ。その陰には、最後の舞台を走れなかった4年生選手がいることも忘れるべきではない。駅伝のタスキは、部員たちのさまざまにまな思いが塗りこめられた総和なのだ。そして、挽回をかける「C」のタスキは、新チームにリレーされた。「企業で陸上を続けます」

池永は、気持ちをとおり直すように、最後はさばさばとした表情で語った。

（福田）





学生記者取材班

〔4年〕

橋本奈緒美 〓 理工学部
福田成幸 〓 法学部

〔3年〕

猪瀬智巳 〓 商学部
白田彩乃 〓 同
津江瞳 〓 文学部

〔2年〕

植松歩美 〓 総合政策学部
大池夏未 〓 同
滝沢孝祐 〓 同

〔1年〕

池内真由 〓 法学部
岩倉彩 〓 商学部
竹下奈穂 〓 経済学部
中島聡 〓 総合政策学部
中田綾美 〓 法学部
八並恵美子 〓 同
山崎綾香 〓 同